

真奴 アルバム

1900年のパリ万博の時に舞台上に立った真奴を見て、作家・アンドレ・ジイドは「絶え間なく美しい」と絶賛し、18歳のピカンはデッサンを描きました。ジヤポニスムにも影響を与えたというその美しさを写真は物語ります。



舞台衣装で



庭先にて



貞奴・音二郎(船上)



福沢桃介と家族

城山三郎と尾張藩 —小説『冬の派閥』—開催に向けて

生前、城山さんは多大な書籍資料を名古屋市中に寄贈されました。保存展示する二葉館には、平成17年に開館記念講演をされた折りと翌年と2度、お越しになりました。

城山さんが亡くなられて(平成19年3月22日)、丸3年を迎える今回の展示は、経済小説、戦争小説、歴史小説とある城山文学の中から歴史小説を取り上げ、その中でも、地元尾張藩を舞台にした『冬の派閥』と『鳩待始末』に焦点をあてます。

『冬の派閥』は中日新聞の連載小説をまとめた長篇です(昭和57年)。実質的に最後の藩主となった徳川慶勝を主人公とし、真面目な律儀者に描かれ、従兄弟の二橋慶喜(後に15代将軍)の指導力を放棄する形での保身と対比されます。そして、この作品で描かれたものとは——作者自身による『冬の派閥』の「あとがき」からご紹介しましょう。



(昭和57年 新潮社刊行)



城山三郎と尾張藩—小説『冬の派閥』—
【開催期間】2月8日(月)～3月14日(日)

「朝命とは、まだ十代の身には、絶対の正義、そして、ゆるぎないもの」に思えた。朝命を奉じ、命をすてて鬼畜米英を撃つ—それ以外に生きがいはない、と思った。太平洋戦争下、まだ十代のわたしの命がけの経験であった。

終戦、そして復員して、その朝命が、まるで朝の霧のように空(むな)しく消えて行ったときの衝撃と悲しみ。大義のいかげんさともいってよいそのことが、わたしの文学の出発点となったのだが、朝命に生き、朝命に翻弄されたのは、あの時代のわたしたちだけではなかった。

幕末の尾張藩をゆきざつた二つの選択、そして二派の争い。その争いに、問答無用の決着をつけたのも、また朝命であった。そして、両派はそれぞれに深い手傷を負うことになった。

—中略—
いまも、人は好むと好まざるにかかわらず、組織に組みこまれていく。金鉄組も、ふいご党も、いまに生きています。

慶勝に似た指導者も、慶喜に似た将もあつたであろう。そうして将の下で、組織に組みこまれない、人はなお生きねばならない。

本書は、歴史小説であるとともに、現代における組織と人間の在りようへの問いかけでもあつた。

昭和56年12月 城山三郎

文化の道 追記 その二



財団法人名古屋陶磁器会館

主税白壁種木町並み保存地区の東、平田町から赤塚へ向かう国道19号線沿いの道から、ふと右に目をやると、マンションに挟まれ、レトロな建物がひっそりと佇んでいます。「あの建物はいったい何だろう?」ちよと気になる。そんな存在なのが名古屋陶磁器会館。

薄暗い玄関を勇気を出して足を踏み入れると、オールデコ調のスタンダードグラスがお出迎え。白を基調としたデザインは陶磁器の白を象徴して

います。そして中へと進むと、まるで昭和の古きよき時代にタイムスリップしたかのような不思議な感覚を味わえます。

タイル貼りの床、階段を懐かしみ、ぎしぎしと響く木張りの床に驚き、70余年前の空間を今もそのままに体感できます。ゆつくりと館内を探索し、ご自身なりの発見をしてお楽しみ下さい。

現在1階の一部を輸出陶磁器の展示、上絵付け教室、転写紙貼り体験、名古屋絵付け陶磁器販売のスペースとして活用し、皆様にお楽しみ頂ける「文化のみち」の観光施設となっています。

展示作品は明治から昭和期に海外へ輸出した製品が並んでいます。[Made in OCCUPIED JAPAN(占領下の日本製)](昭和22年(26年)の文字が記された展示品もあります。

DATA

財団法人
名古屋陶磁器会館

■開館時間
午前10時～午後5時 日曜・祝日休館

■入館無料 ■名古屋市中区徳川一丁目10-3

■TEL 052-935-7841

<http://nagoya-toujikiikaikan.org>

財団法人名古屋陶磁器会館
事務局長 松井三希子



(昭和33年 赤門文学会発行)

一方、『鳩待始末』の初出は同人雑誌『赤門文学』(昭和三十三年第十号)でした。後に『城山三郎全集』第十巻や短編集『逃亡者』(新潮社)に含まれています。

この2作品を生み出した背景過程などの貴重な資料を展示します。どうぞご覧ください。

書庫棟から

「ふみべら」
文化のみち二葉館の裏庭に、「土蔵」が見えます。その後ろに書庫棟があります。現在は一般に開放されていません。職員と文学ボランティアが、城山三郎・春日井建・その他の文学関係者から寄贈された図書などを整理しています。書籍を保存している建物を書庫といいます。普通、図書館では閲覧室・書庫・事務室を備えています。小さいながら本館でも設備されています。

書庫は古くは「ふみべら」「文庫」とも言われます。書物は長く伝えて行かなければならない貴重品です。土蔵に見られるように、火気・湿度・虫を嫌い、厚い土壁で囲い、窓を小さくして外気を防ぎます。ふみべらも書物の倉庫ではあっても、同様な機能を持たせなければなりません。防火に留意し、空調調節で万全を期しています。このため、人の出入りを制限します。



稲葉誠也(文学ボランティア)
本は紙と糊と布で構成されます。洋装本では革が加わります。革は湿度を嫌います。この素材を考慮すれば、開放できない訳を理解していただけるでしょう。

書物は書架に配架されます。固定書架に加えて移動書架が設置されます。手動と電動があり、スチール製の丈夫なものです(本に優しいのは木製ですが)。二葉館の書庫棟では手動を設置しています。

書庫見学会が開かれた折には、参加してみてください。